

日蓮大聖人御書全集

じびようだいしょうごんじついもく

治病大小権実違目

新版
1329
ゝ
1334

じびようだいしようこんじついもく

治病大小権実違目

こうあんがんねん

弘安元年('78)

がつ にち

6月26日

さい

57歳

ときじょうにん

富木常忍

ときにゆうどうどのごへんじ

富木入道殿御返事

にちれん

日蓮

ごしようそく い

えきびよう

こうじよう

とううんぬん

御消息に云わく「およそ疫病いよいよ興盛なり」等云々。

そ ひと ふた

やまい

いち

み

やまい

ち

夫れ、人に二つの病あり。一には身の病。いわゆる、地

だいひやくいち

すいだいひやくいち

かだいひやくいち

ふうだいひやくいち

いじようしひやくしびよう

大百一、水大百一、火大百一、風大百一、已上四百四病

やまい

ほとけ

じ

なり。この病は、たとい仏にあらざれどもこれを治す。い

じすい

るすい

ぎば

へんじやくとう

ほうやく

じ

癒

わゆる治水・流水・耆婆・扁鵲等が方薬、これを治するにい

ゆて愈えずといふことなし。二には心の病。いわゆる三毒

ないしはちまんしせん やまい やまい にてんさんせん ろくしとう じ

乃至八万四千の病なり。この病は二天三仙・六師等も治し

がた しんのう こうていとう ほうやくおよ

難し。いかにいわんや、神農・黄帝等の方薬及ぶべしや。

こころ やまい じゆうじゆう せんじん しょうれつわ ろくどう

また心の病、重々に浅深・勝劣分かれたり。六道の

ぼんぷ さんどく はちまんせせん こころ やまい しょうぶつ しょうじよう あごんきよう

凡夫の三毒・八万四千の心の病は、小仏・小乗の阿含経、

くしゃ じようじつ りつしゆう ろんじ にんし じ い

俱舍・成実・律宗の論師・人師、これを治するにゆいて愈

しょうじよう ものとう しょうじよう もと

えぬべし。ただし、この小乗の者等、小乗を本として、

だいじよう そむ こころ そむ だいじよう

あるいは大乘を背き、あるいは心には背かざれども大乘

くに かた なら くに ひと しょうびよう お

の国に肩を並べなんとする、その国・その人に諸病起こる。

しようじようとう

じ

しよびよう

ま

じ

小乗等をもつてこれを治すれば、諸病は増すとも治せら

しよだいじようきよう

ぎようじや

じ

るることなし。諸大乘経の行者をもつてこれを治すれば、

すなわ へいゆ

けこんきよう

じんみつきよう

はんにやきよう

だいにちきようとう

則ち平愈す。また、華嚴経・深密経・般若経・大日経等

ごんだいじよう

ひとびと

おのおの

おと

すぐ

おも

けん

お

の権大乘の人々、各々「劣れるを勝ると謂う見」を起こし

わ しゆう

ほけきよう

さいとう

すぐ

て、我が宗はあるいは「法華経と齐等」、あるいは「勝れ

もう

ひととお

しゆつたい

こくしゆとう

もち

たり」なんと申す人多く出来し、あるいは国主等これを用

さんどく

はちまんしせん

やまいお

いぬれば、これによつて、三毒・八万四千の病起こる。か

みずか

えきよう

じ

ばいぞう

えつて、自らの依経をもつて治すれども、いよいよ倍增す。

ほけきよう

おこな

しるし

きよう

すぐ

たとい法華経をもつて行うとも験なし。経は勝れたれど

も、行者、僻見の者なる故なり。

ぎようじゃ
びやつけん
もの
ゆえ

ほけきよう
にきよう

しやくもん

ほんもん

法華經にまた二經あり。いわゆる迹門と本門となり。

ほんじやく
そうい
すいか
てんち
いもく

れい

にぜん

ほけきよう

本迹の相違は水火・天地の違目なり。例せば、爾前と法華經

いもく

そうい

にぜん

しやくもん

そうい

との違目よりもなお相違あり。爾前と迹門とは、相違あり

そうじ

へん

あ

しよせつ

はつきよう

にぜん

といえども相似の辺も有りぬべし。所説に八教あり。爾前

えん

しやくもん

えん

そうじ

にぜん

ほとけ

しやくもん

ほとけ

の円と迹門の円は相似せり。爾前の仏と迹門の仏は、

れつおう

しようおう

ほうしん

ほっしんこと

しじよう

へん

おな

劣応・勝応・報身・法身異なれども、始成の辺は同じきぞ

いま
ほんもん

しやくもん

きようしゆ

く

し

変

目

かし。今、本門と迹門とは、教主すでに久・始のかわりめ、

ひやくさい

翁

いっさい

おきなご

でし

すいか

百歳のおきなと一歳の幼子のごとし。弟子また水火なり。

ど せんご

ほんじやく こんごう

土の先後いふばかりなし。しかるを、本迹を混合すれば、

すいか わきま もの

水火を弁えざる者なり。

ほとけ ふんみよう と わ たま ほとけ

しかるを、仏は分明に説き分け給いたれども、仏の

ごにゆうめつ いま にせんよねん あいだ さんごく いちえんぶだい うち

御入滅より今に二千余年が間、三国ならびに一閻浮提の内

ふんみよう わ ひと かんど てんだい にほん でんぎよう

に分明に分けたる人なし。ただ漢土の天台、日本の伝教、

ににん わ たま そちら

この二人ばかりこそほぼ分け給いて候えども、本門と

しやくもん だいじ えんかい ふんみよう せん

迹門との大事に円戒いまだ分明ならず。詮ずるところは、

てんだい でんぎよう うち かんが たも いち とききた

天台と伝教とは内には鑑み給うといえども、一には時来

に き さん ゆず たま ゆえ いま まっぼう

らず、二には機なし、三には譲られ給わざる故なり。今、末法

い じゆしゆつげん ぐつう
に入りぬ。地涌出現して弘通あるべきことなり。

いま まつぼう い ほんもん 広 たも
今、末法に入つて本門のひろまらせ給うべきには、

しょうじよう こんだいじよう しゃくもん ひとびと とが かがれ
小乗・権大乘・迹門の人々、たとい科なくとも、彼々の

ほう しるしあ たと はる くすり あきくすり
法にては験有るべからず。譬えば、春の薬は秋薬となら

ず。たといなれども、春夏のごとくならず。いかにいわん

か しょうじよう こんだいじよう ほけきよう しゃくもん ひとびと
や、彼の小乗・権大乘・法華經の迹門の人々、あるい

だいしょう こんじつ まよ うえ じようだい こくしゆ かがれ きようぎよう つ
は大小・権実に迷える上、上代の国主、彼々の經々に付

てら た でんぱた きしん ゆえ か ほう くだ もう の
いて寺を立て田畠も寄進せる故に、彼の法を下せば申し述

うえ えこ うしな ゆえ だいしんに お
べがたき上、依怙すでに失せるかの故に、大瞋恚を起こし

て、あるいは実経を謗じ、あるいは行者をあだむ。国主も

ひと たにん 付

また、一つには多人につき、あるいは上代の国主の崇重の

ほう がた ゆえ じしん ぐち ゆえ

法をあらため難き故、あるいは自身の愚癡の故、あるいは

じつきよう ぎようじゃ いや とう ゆえ か そにんとう ことば 納

実教の行者を賤しむゆえ等の故、彼の訴人等の語をおさ

じつきよう ぎようじゃ じつきよう しゆごしん ぼんしやく

めて実教の行者をあだめば、実教の守護神の梵釈・

にちがつ してんとう くに ばつ ゆえ せんだいみもん さんさいしちなんお

日月・四天等その国を罰する故に、先代未聞の三災七難起こ

こそ ことし い しょうかとう えきびようとう

るべし。いわゆる、去・今年、去ぬる正嘉等の疫病等なり。

うたが い なんじ もう くにほけきよう

疑って云わく、汝が申すがごとくならば、この国法華経

ぎようじゃ 怨 ゆえ ぜんじん くに じばつ とう しょにん

の行者をあだむ故に善神この国を治罰する等ならば、諸人

えきびよう

なん

なんじ

でしとう

病し

の疫病しかるべし。何ぞ、汝が弟子等、またやみ死ぬる

や。

こた

い

なんじ

ふしんもつと

いわ

あ

答えて云わく、汝が不審最もその謂れ有るか。ただし、

いっぽう

し

いっぽう

し

ぜん

あく

むし

そう

一方を知つて一方を知らざるか。善と悪とは無始よりの左右

ほう

ごんきよう

しよしゆう

こころ

ぜんあく

とうかく

かぎ

の法なり。権教ならびに諸宗の心は、善悪は等覚に限る。

とうかく

たが

とがあ

ほつけしゆう

こころ

もししからば、等覚までは互いに失有るべし。法華宗の心

いちねんさんぜん

しやうあく

しやうぜん

みやうかく

くらい

そな

は一念三千なり。性悪・性善、妙覚の位になお備われり。

がんぽん

ほつしやう

ぼんてん

たいしやくとう

あらわ

がんぽん

むみやう

だいろうくてん

元品の法性は梵天・帝釈等と顕れ、元品の無明は第六天の

まおう

あらわ

ぜんじん

あくにん

怨

あつき

ぜんにん

魔王と顕れたり。善神は悪人をあだむ。悪鬼は善人をあだ

まつぼう

い

じねん

あつき

こくちゆう

じゆうまん

む。末法に入りぬれば、自然に悪鬼は国中に充満せり。

がしやく

そうもく

なら

しげ

ぜんき

てんか

すく

しょうけん

瓦石・草木の並び滋きがごとし。善鬼は天下に少なし。聖賢

希

ゆえ

えきびよう

ねんぶつしや

しんごんし

ぜんしゆう

りつ

まれなる故なり。この疫病は、念仏者・真言師・禅宗・律

そうとう

にちれん

かた

おお

病

し

そうろう

僧等よりも日蓮が方にこそ多くやみ死ぬべきにて候か。

そうら

かれ

少

病

少

いかにして候やらん、彼らよりもすくなくやみすくなく

し

そうろう

ふしぎ

覚

そうろう

ひと

ゆえ

死に候は、不思議におぼえ候。人のすくなき故か、また

ごしんじん

ごうじよう

御信心の強盛なるか。

と

い

にほんこく

えきびよう

せんだい

あ

問うて云わく、日本国に、この疫病、先代に有りや。

こた

い

にほんこく

じんむてんのう

じゆうだい

当

答えて云わく、日本国は神武天皇よりは十代にあたらせ

たま すじんてんのう みよ えきびようお にほんこく病 し

給いし崇神天皇の御代に疫病起こつて、日本国やみ死ぬる

なか 過 おう はじ てんしやうだいじんとう かみ くにぐに あが

こと半ばにすぐ。王、始めて天照太神等の神を国々に崇め

えきびよう止 ゆえ すじんてんのう もう ぶつぼう

しかば、疫病やみぬ。故に崇神天皇と申す。これは仏法の

渡 とき にんのうだいさんじゆうだい

いまだわたらざりし時のことなり。人王第三十代ならびに

いち に さんだい こくしゆ しんかとう ほうそう えきびよう ごほうきよ

一・二の三代の国主、ならびに臣下等、疱瘡と疫病に御崩去

とう とき かみ 祈 かな

等なりき。その時は神にいのれども叶わざりき。

い にんのうだいさんじゆうだい きんめいてんのう ぎよう ひやくさいこく

去ぬる人王第三十代欽明天皇の御宇に、百済国より

きよう ろん そうとう 渡 こんどう きようしゆしやくそん わた

経・論・僧等をわたすのみならず、金銅の教主釈尊を渡

たてまつ そがのすくねとう あが もう もののべのおおむらじとう

し奉る。蘇我宿禰等、「崇むべし」と申す。物部大連等

しよしん

ばんみんとう

いちどう

ほとけ

あが

の諸臣ならびに万民等は、一同に「この仏は崇むべからず。

あが

かなら

わ

くに

かみ

いか

くに

破

もし崇むるならば、必ず我が国の神、瞋りをなして、国やぶ

もう

おう

りようほうわきま

さんさい

れなん」と申す。王は両方弁えがたくおわせしに、三災

しちなん

せんだい

こ

お

ばんみんみなえきし

おおむらじとうたよ

七難、先代に超えて起こつて、万民皆疫死す。大連等便り

そうもん

そうにとう

恥

およ

をえて奏聞せしかば、僧尼等をはじに及ぼすのみならず、

こんどう

しゃかぶつ

炭

熾

や

たてまつ

てら

おな

金銅の釈迦仏をすみをおこして焼き奉る。寺また同じ。

とき

おおむらじ病

し

おう

かく

たま

ほとけ

崇

その時に大連やみ死ぬ。王も隠れさせ給い、仏をあがめ

そがのすくね

病

し蘇我宿禰もやみぬ。

おおむらじ

こ

もりやのおとどい

ほとけ

崇

ゆえ

大連が子・守屋大臣云わく「この仏をあがむる故に、

さんだい こくしゆ

病 隠

たも わ ちち 病 し

三代の国主すでにやみかくれさせ給う。我が父もやみ死ぬ。

し ほとけ

しょうとくたいし うまことう

親

まさに知るべし、仏をあがむる聖徳太子・馬子等はおやの

敵 きみ おん

もう

あなほべのみこ やかべの

かたき、公の御かたきなり」と申せしかば、穴部王子・宅部

み ことう

しよしん い げすうせん にん

いちどう

与 力

ほとけ

王子等ならびに諸臣已下数千人、一同によりきして、仏と

どうとう

焼 払

かつせん

お

けつく

堂等をやきはらうのみならず、合戦すでに起こりぬ。結句は

もりやう

お

ぶつぼうわた

さんじゅうごねん

あいだ

ねんねん

守屋討たれ了わんぬ。仏法渡つて三十五年が間、年々に

さんさいしちなん

えきびよう お

もりや

うまこ

う

三災七難・疫病起こりしが、守屋、馬子に討たるるのみな

かみ

ほとけ

負

さいなん

や

お

らず、神もすでに仏にまけしかば、災難たちまちに止み了

わんぬ。

のち だいたい さんさいしちなんとう だいたい ぶつぼう うち みだ
その後の代々の三災七難等は、大体は仏法の内の乱れよ

お
り起こるなり。しかれども、あるいは一人二人、あるいは

いっくくにこく

いちるいにするい

いっしよにしよ

一国二国、あるいは一類二類、あるいは一処二処のことな

かみ

崇

あ

ほうぼう

ゆえ

たみ

歎

れば、神のたたりも有り、謗法の故もあり、民のなげきよ

お

りも起こる。

さんじゆうよねん

さんさいしちなんとう

いっこう

たじ

まじ

しかるに、この三十余年の三災七難等は、一向に他事を雑

にほんいちどう

にちれん

怨

くにぐに

こおりこおり

ごうごう

えず、日本一同に日蓮をあだみて、国々・郡々・郷々・

むらむら

ひと

かみいちにん

しもばんみん

ぜんだいみもん

村々・人ごとに、上一人より下万民にいたるまで、前代未聞

だいしんい

お

けんじみだん

ぼんぷ

がんぼん

むみよう

お

の大瞋恚を起こせり。見思未断の凡夫の元品の無明を起ここ

すこと、これ始めなり。はじ 神と仏かみと法華經ほとけにいのり奉ほけきようらば、

いよいよ増長すべし。ぞうちよう ただし、法華經の本門をば法華經の

行者につけて除き奉ぎようじやる。付 のぞ たてまつ

結句は、勝負を決せざらん外は、この災難止み難かるべし。けつく しようぶ けつ ほか さいなんや がた

止觀の十境十乗の觀法は、天台大師説き給いて後、行しかん じつきようじゆうじよう かんぼう てんだいだいしと たま のち ぎよう

ずる人無し。妙樂・伝教の御時少し行ずといえども、敵人ひとな みようらく でんぎよう おんときすこ ぎよう てきじん

ゆわきゆえにさてすぎぬ。止觀に三障四魔と申すは、権經弱 しかん さんしようしま もう ごんきよう

を行ずる行人の障りにはあらず。今、日蓮が時、つぶさぎよう ぎようにん さわ いま にちれん とき

に起これり。また天台・伝教等の時の三障四魔よりも、お てんだい でんぎようとう とき さんしようしま

一 入 勝

いちねんさんぜん

かんぼう

ふた

いち

いまひとしおまさりたり。一念三千の観法に二つあり。一に

りに

じ

てんだい

でんぎようとう

おんとき

り

いま

は理、二には事なり。天台・伝教等の御時には理なり。今は

じ

かんねん

まさ

ゆえ

だいなん

いろ

かれ

しやくもん

事なり。観念すでに勝る故に、大難また色まさる。彼は迹門

いちねんさんぜん

ほんもん

いちねんさんぜん

てんち

こと

の一念三千、これは本門の一念三千なり。天地はるかに殊な

べりんじゆう

おんとき

おんこころ 得

そうろう

きようきよう

りことなりと、御臨終の御時は御心えあるべく候。恐々

きんげん

謹言。

ろくがつにじゅうろくにち

にちれん

かおう

六月二十六日

日蓮

花押

左 衛

門 どの

びんぎ

おん

帷

た

そうら

お

さえもん殿の便宜の御かたびら、給ひ候い了わんぬ。

こんど

ひとびと

ご

齋

さえもんのじようどの

今度の人々のかたがたの御さいども、左衛門尉殿の

ごにつき
御日記のごとく給び了わんぬと申させ給い候え。

おおたにゆうどうどの

富木 殿 につき

太田入道殿のかたがたのもの、ときどのの日記のごと

た そちら お

ほうもん 片 面

さえもんのじようどの

く給び候い了わんぬ。この法門のかたづらは左衛門尉殿に

書 そちら 請

たま ご 覧

そちら

かきて候。こわせ給いて御らんあるべく候。